T I C O

Face to Face

TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。
地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター　No.30　2012年7月号

ザンビア
お産を待つ家、完成！
お産を待つ家が完工しました。看護師の派遣により開所が切望されます。
☞*p.2*

ザンビア
ンコンジェ小学校
トイレと教師の家の建設状況とこぼれ話をお届けします。
☞*p.3*

ザンビア
中間調査報告
安全な妊娠出産支援事業の中間調査結果と、研修内容をご報告します。
☞*p.4-5*

カンボジア
医療者の日本招へい
ポチェントン病院から2名の医療者を日本に招いて医療研修を実施しました。
☞*p.6*

ザンビア
農村開発ローン
最後のローングループのご報告と、離着任の挨拶をお届けします。
☞*p.7*

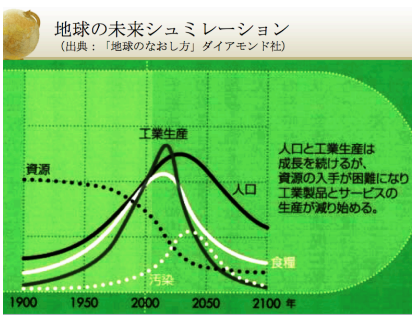
リオ+20 グリーンエコノミー

TICO 代表　吉田　修

ストックホルム国連人間環境会議「成長の限界」から40年、環境と開発のための国連会議（リオ地球サミット）から20年、国連持続可能な開発会議（リオ+20）があまり注目もされないまま終わってしまった。グリーンエコノミーに向かっていくことは確認されたが、具体的な数値目標などは示されなかった。

さて、4月の地球人カレッジ、佐野淳也さんの資料から人類の未来を考えたい。国連の予想では、人口は2050年に90億人を突破する。

しかし、別の予測では人口は、もうすぐ減少に転じ2050年には60億人程度になっている。資源の枯渇や環境の悪化により、食糧生産や工業生産が急激に減少するからである。このまま消費文明を続けていくと地球はそれだけの人口を養えないということである。



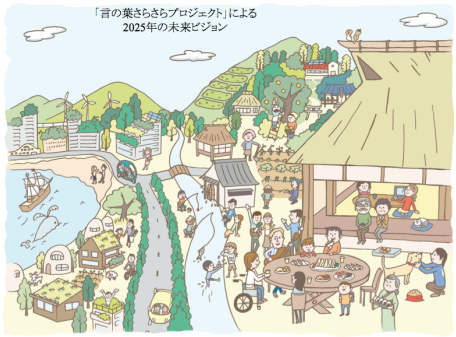
この30億人の差を考えると大変恐ろしい。もしかしたら、この30億人は、生まれたけれども生きられない、人類大量死を意味するのではないだろうか。とてつもない数字である。しかし、人類大量死の予兆として既に生物種の大絶滅が起きている。この悲劇を避けるために、ポイントは2つある。

第一に、早急に資源の枯渇に対応できる社会、すなわち持続可能な循環型の社会を構築しなければならない。再生可能なエネルギーにシフトしなければならない。持続可能な方法で農業を行い、食糧を確保しなければならない。これは大量の資源を消費しエコロジカルフットプリントの高い先進国に、より責任がありそうである。

第二に、人口を抑制しなければならない。もちろん民主的な方法で、個人の意志は尊重されなければならないが。特に人口増加率の高い発展途上国が問題である。

日本は少子化・超高齢化社会を世界に先駆けて迎えている。「未来のシュミレーション」が示す縮小社会の最先端を経験しつつあり、景気の低迷、社会保障制度の脆弱さなど大問題を抱えている。また、原発事故を契機にやっとエネルギーシフトや節電に本気で取り組もうとしている。日本人の英知を結集して、これらの難問を乗り越え、人類の進むべき次の時代を世界に示そうではないか。

暗い話の様に思われたかもしれないが、下の絵を見てみると目指すべき持続可能な社会とは、健康的で安全でゆったりとした幸福度の高い社会ではないだろうか。そしてそれはきっと地方から始まっていく。



よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。
写真は田植え中の吉田。

お産を待つ家、完成！

瀬戸口千佳（業務調整員）

前号でお知らせしたナースの家の完成に続いて、4月末日、ついにお産を待つ家が完工の時を迎えました！

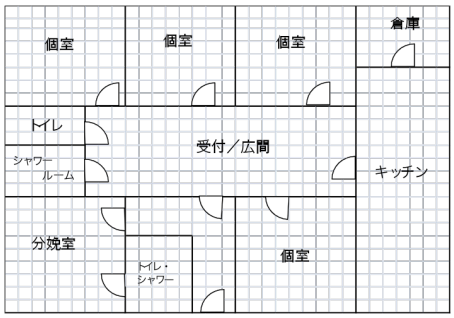
このお産を待つ家を併設するヘルスポスト（簡易診療所）に配属されているのは、助産師の資格を持つ看護師１人だけ。いまある仕事ですでに手いっぱいのため、このままの状態ではお産を待つ家を稼動することはできません。

というのも、郡保健局からいまだにナースが派遣されておらず、完成を急いだ宿舎も空いたままという状態が続いているからです。

一方で、安全なお産支援グループ（SMAG）の熱心な活動の結果、ヘルスポストでの分娩数は増加傾向にあります。一日も早く、モンボシ地域の妊婦さんたちが、整った環境のもと出産に臨むことができるようになるよう、引き続き関係諸機関に働きかけていきますので、応援よろしくお願いします。

シャワールーム

個室



▲お産を待つ家見取り図

キッチン側の扉から見た受付／広間

キッチン

猫目線

乾季になりぐっと寒くなったため、のど風邪をひいてしまったわたくし、猫のチャイです。みなさんはいかがお過ごしでしょうか。

こちらザンビアの方たちは日本人同様、互いを名字で呼びあい、肩書を大切にしています。個人名を呼ばず「委員長」や「校長先生」と肩書だけで話をすることもあるため、ご主人も最初はその都度「それは誰のこと？」と名前を確認しなければ会話が進まなかったようです。また名前を呼ぶ場合でも、きちんとその前に敬称を示す単語をつけるのがマナーです（親しい間柄では不要な場合もあります）。名前の前に「Ba（バ）」とつければ、まずはOK。苗字でも名前でも男性でも女性でも適用可能です。次に「Ba Muka（バ ムカ）」。これは既婚女性を呼ぶ際に使われるのですが、この敬称の次に来るのは女性の姓でなく夫の姓。日本語でいうと「〇〇さんの奥さん」といったところでしょうか。既婚女性の呼び方としてはもう一つ「Ba Bina（バ ビナ）」というのがあり、子どもの名前が続いて「〇〇ちゃん／くんのお母さん」という言い方。お父さんバージョンは「Ba Mnishi（バ ムニシ）」です。

女性の敬称といえば、英語でもミス、ミセスと未婚・既婚を区別する言い方がありますが、ご主人がショックを受けたのはシスターという呼び方があること。これは未婚女性の中でも特に「若い」女性を指すときに使い、若くない女性はすでに結婚していることが多いザンビアでは、ミスはどちらかというと離婚したり夫と死別した女性に使われる傾向があります。なぜご主人がショックを受けたかというと、「シスターはどの年まで適用可能なのか。」という淡い期待で尋ねた答えが「16歳過ぎれば結婚し始めるから、25歳過ぎて結婚してないってのはあり得ないね。」と当然の口調で言われたからだそうです。

果たしてご主人はシスターなのかミスなのか、「マダム」と呼ばれているがその真意とは？

同じメスでも猫の私には関係のない話ですね。にゃー。

ンコンジェ小学校のトイレと教師の家ができるまで

瀬戸口千佳（業務調整員）

校舎2棟が無事に完成したンコンジェ・コミュニティスクールでは現在、生徒用のトイレ（男女2棟ずつ）および政府から認可をうけた教師を派遣してもらうための教員用住宅1棟を引き続いて建設中です。
トイレは完成に近づいており、教員用住宅も基礎工事が終了しています。

トイレができるまで

①穴を掘って→②排泄物を溜める大きな穴をブロックで作り→③穴を残して蓋をし→④レンガを積み上げ屋根をつけて、セメントで壁を固め、ペンキを塗って、排水溝を作ればトイレの完成！

教師の家の現状

さて、今回はそんなンコンジェ・コミュニティスクールでの建築の合間にのぞいたひとコマをお伝えしたいと思います。

ある日いつものように建築の進捗状況を確認しに行くと、何やらたくさんの小さな三角小屋がずらっと並んでいるではありませんか。さて、みなさんこれが何だかお分かりになりますか？

正解はハッチと呼ばれるニワトリが卵を産んで温めるための部屋。なぜこんなにたくさんあるのかというと、これ、日本で言う図画工作の授業で生徒が作った作品なのです。生活に密着した作品ですよね。よく見るとそれぞれに個性があっておもしろい。

▲成績優秀組の作品

▲成績…組の作品

やはり高学年になるほど腕があがるそうです。

また別の日に学校をのぞくとたくさんの教科書や絵本がずらっと並んでいます。

「どうしたの？？」と校長先生に聞くと教育系NGOのプログラムの一環で配られたとのこと。「TICOが建ててくれた校舎はセキュリティがしっかりしているから、図書の配布先として選んでもらえたんだ。TICOがいろんな可能性へのドアを開いてくれたんだよ。」と、とても嬉しそうに話してくれました。

ザンビアに赴任してはや半年。ンコンジェ・コミュニティスクールに通う子どもたちに、よりよい教育環境で勉強してもらうため、村の人たち、そして彼らから選ばれた作業員たちと一緒に力を合わせてがんばっています。「地域住民とともに」ということを主眼とした建設事業なので、どうしても進み具合はザンビアペースになってしまうのですが、引き続きのご支援をどうかよろしくお願い致します。

中間評価調査報告　ザンビア／チボンボ郡モンボシ

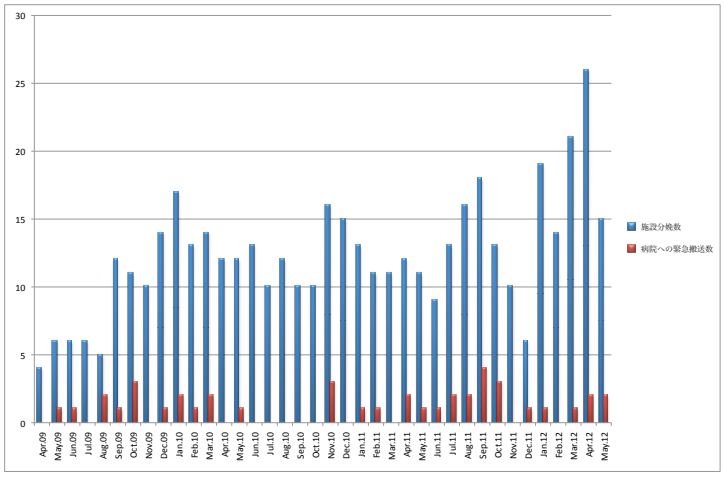
加藤琢真（短期保健医療専門家）

2010年10月に開始された「ザンビア共和国チボンボ郡地域住民が支える安全な妊娠／出産の支援事業」が1年8か月経過したため、2012年6月に中間評価を実施してきました。

本事業は、ミレニアム開発目標（MDGs）ひとつとして世界的に取り組まれている妊産婦死亡の減少を一つの目標としています。妊産婦保健に関する住民組織「安全なお産支援グループ」（以下、SMAG：Safe Motherhood Action Group, スマッグ）を編成し、施設分娩の重要性、どんな時に緊急で受診しなければならないのか、また妊産婦検診の重要性を地域住民に伝え、安全な妊娠及び出産を支援することが、主な活動内容となっています。

施設分娩数の増加

SMAGが養成されて約1年経過しましたが、既に効果が見られたものもあります。近年、アフリカでこれまでお産の介助を広く担ってきた伝統的産婆に対してトレーニングなどを実施してきましたが効果が上がらなかったため、医療施設でのお産を推進することになりました。SMAGもそうした政府の政策に則り、施設分娩を促してきた結果、モンボシのヘルスポスト（簡易診療所）での分娩数がここ数か月、前年度の2倍近くにまで増加してきています。



▲分娩数の推移（2009年4月～2012年3月）

他にも多産多死であるため、お母さんの健康状態の改善、こどもに対する十分なケア、お産費用の貯蓄などの利点を掲げたFamily Planning（家族計画）の必要性も、SMAGは地域住民にアピールしています。今回参加させてもらった乳幼児健診においても経口避妊薬（ピル）やコンドームを看護師に求めるお母さんたちの列が出来るなど徐々に定着しつつあるようです。

SMAGメンバーの知識不足

さてここまで一見順調のようですが、必ずしも全てとはいきません。家族内での意思決定権を持つのは多くの場合男性であることから、母子保健分野に男性を巻き込む先鋒として、これまであまりお産に関わったことのない男性もSMAGの中心メンバーになっていますが、やはり実体験がないのは不利。健康教室などで妊娠中の危険兆候（「強い頭痛」、「顔や手のむくみ」など）を発表する際も知識があやふやなところもあり、住民に頼られるようになるにはまだ少し時間がかかりそうです。また、これまで研修と言えば外部講師に講義を依頼してきましたが、頻繁に呼ぶことはできないため、毎月の会議の時にトピックを絞って自主勉強会を開くことを提案してきました。彼らも知識が不十分であることは認識していたようで前向きに取り組んでくれそうです。

活動の継続性

もう一つ大切な問題としてSMAGの活動費用の問題があります。緊急時に妊婦を村からヘルスポストに運ぶための自転車救急車やメンバーだと認識してもらうためのTシャツなどは提供したものの、その後のメンテナンスや他の活動の費用に関しては自分たちで賄っていかなければなりません（SMAGは無償のボランティア）。そうした活動費用を獲得するために収入創出活動（以下、IGA：Income Generating Activity, アイジーエー）を始めています。大豆の栽培と養鶏に取り組んでおり、月例ミーティングの中でも特にこのIGAに関する議論はみんな熱を入れて議論しています。いくつか課題はあるものの、この力の入れ方は将来的には彼ら自身で乗り越えてくれることが十分に期待されます。

緊急時の搬送先での対応

妊産婦を守るためには、住民啓発だけでは不十分です。実際に施設分娩を選択した妊産婦に対して十分なケアが実施できるような医療施設がまず必要ですが、2012年4月に「お産を待つ家」が完成（2頁参照）しています。そして緊急時に妊産婦が送られる病院側で緊急産科ケアができる医師と看護師が必要ですが、モンボシから一番近い病院では、現在政府により改善が見込まれているとのことで、SMAGの活動が効果を上げると相乗的に目標に近づく環境が整いつつあるのかもしれません。

本格的に軌道に乗るためには、もう少し時間と工夫が要りそうですが、着実に一歩ずつ前に進んでいるこの事業。1年半後、そして5年後10年後、SMAGのメンバーがどのように地域で活躍しているのかが今から非常に楽しみです。

聞き取り調査のようす

地域住民が支える安全な妊娠・出産の支援事業

瀬戸口千佳（業務調整員）

10代での妊娠防止に向けて

ピア・エデュケーションという言葉をご存知ですか？

ピア（peer）というのは「（年齢・地位・能力などが）同等の者」という意味で「仲間」と訳されたりします。特にHIV/AIDSなど性感染症の啓発活動に用いられることが多い健康教育の手法の一つなのですが、性に関わる問題というのはなかなか社会的に表面化しにくく、オープンに議論することもはばかられたり、わが身に起こりうることであるという当事者意識を持ちにくい性質があります。その場合、専門家的立場や社会的立場が上の人から教えられるよりも、同じような年齢・立場にいる普通の人、もっと言えば自分の友人や仲間から聞いた話の方がずっと耳に入り易く説得力がある、ということで「仲間による教育（ピア・エデュケーション）」と呼ばれています。

ピア・エデュケーター養成研修

前号でお伝えした、地域で影響力のある人たちとの話し合いの中で、地域が抱える課題の一つとして「若年妊娠（10代での妊娠）」が挙がりました。身体が十分に成熟していない状態での性交渉や妊娠・出産は母体に大きなダメージを与え、早産や低体重など産まれて来る子どもへのリスクも高まります。学校に通っていても辞めざるを得なかったり、男性側が逃げてしまうこともあったりするため、社会的・経済的に困窮するきっかけにもなります。しかし、自分の子どもや生徒、地域の若者に対して性について話すということはタブー状態。そこでターゲットとするティーンエイジャーの中から、ピア・エデュケーター（ピア・エデュケーションの指導者）を養成し、彼らから若年妊娠の危険性についてのメッセージを広めてもらうことを目的に、この5月に研修を実施しました。モンボシ地域にある学校10校から参加がありました。

まずは思春期の体の変化や妊娠の仕組みなど性と生殖に関する知識について学んだあと、若年妊娠を誘発する原因についてディスカッションしたり、啓発の手法としての劇や詩、模擬討論の練習をしたりしました。

模擬討論のようす

当初は性に関する単語が飛び出すたびに照れ笑いをしたり、コンドームが感染症を広げるとか経口避妊薬（ピル）は女性の体に悪いという誤解を持っていたり、教えられたことをただオウム返しに復唱するだけだったり、不安に思うことも多々あったのですが、研修が進むにつれ、劇や模擬討論の内容が充実し、自信を持って発言する生徒が増えました。例えば、キリスト教徒が多いザンビアでは、結婚するまでは禁欲すべきとの規範があり、コンドームを使うのは遊んでいる証拠と見なされるため、学生が「コンドームを使おう！」と表立っては言いにくいようで、『コンドームを使う？使わない？』とのテーマで討論していても「そもそも結婚する前に性交渉してはいけない。」と言われてしまうと、使用推進派は十分に反論出来なかったのですが、最終日には「確かに性交渉しないのが性感染症や若年妊娠を防ぐには一番かもしれないが、そういうことになったときにコンドームは自分も相手も守るものだから僕は使うよ。」と自分の言葉で表現できるようになっていました。

啓発劇を練習中

ザンビアの性教育の方針はA：Abstinence（禁欲）、B：Be faithful（一人のパートナーを大切にする）、C：Condom（コンドームを使う）のABCとなっており、あまりに早いタイミングでコンドームの使い方等を教えてしまうと逆に性行動を誘発してしまうのではないかという危惧や、コンドームを使っていれば万事OKという安心からリスクの高い性行動を取ってしまう危険性もあるため、上記のようなバランスの取れたメッセージがすっと出て来るのはとても心強いことです。

とはいえ、いくら生徒が正しい知識を身につけたとしても親が早く結婚させたがったり、伝統的な通過儀礼の習慣が残っていたり、年頃になると別棟（※）が与えられ親の目を簡単にくぐり抜けられる状態であったり、結婚する前に未経験だと馬鹿にされるという考え方があったりと望ましい行動を取りにくい社会環境はあるわけで、いろんな方向から辛抱強く働きかけていくことに変わりはありません。

それでも、ピア・エデュケーターとして養成された学生たちの研修中の成長ぶりを見るにつけ、彼らの活動が少しずつでも変化を招く端緒になればと期待せずにはいられないのでした。

※日本でも思春期になると個室が与えられたりしますが、村では一つの建物の中にいくつも部屋があるわけでなく、キッチンやトイレなど機能別に棟（マッシュルームハット）を建てることが多く、同じ敷地内ではあるものの母屋と離れた棟がその子ども専用に建てられるそうです。

2010年10月から始まった、ザンビア・チボンボ郡モンボシにて安全な妊娠・出産のための環境づくりを目標としたプロジェクト。JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受けています。

カンボジア／ポチェントン病院より医療者招へい

AEDを使った模擬訓練は、救急隊員と診療所職員の協力を得て行われた

公益社団法人セカンドハンド（本部：高松市）と共同で、カンボジアのポチェントン病院から医療者を招へいし、研修を実施しました。

6月20～28日の期間で来日し、香川県立中央病院、高松市消防局、さくら診療所で医療研修を受けたのは准医師のヒエン・スレイさん（写真下の中央）と看護師のレン・マニーさん（写真下の左）の2人です。

准医師のスレイさんは産科医とあって、普段はお産をとりあげたり、健診をしたり、救急に関しては病院の受け入れ側として活躍しています。看護師のマニーさんは薬剤の仕事も担当しており、救急車に乗って救急対応のために現場に向かうこともあるそうです。

2人はTICOの代表・吉田が理事長を務めるさくら診療所で、保健医療専門家である渡部医師が中心となって実施した研修に、2日間に渡って参加しました。診察の様子や診療所の見学、救急症例をシュミレーションしての模擬訓練や講義など、真剣な眼差しでひとつひとつ丁寧に取り組んでいるスレイさんとマニーさん。さくら診療所の職員や地元の西消防署の救急隊員にもご協力いただき、2日間の研修は進められました。

前回9月に研修を行った際、他団体から預かっていたAED（体外式自動除細動器）をポチェントン病院に寄贈しました。そのAEDですが、使うべき時に使えるよう、救急隊の方から心肺蘇生と合わせて使用方法の講習がありました。他にも意識障害やショックの診断・対応、気道確保などいくつかの症例をシュミレーションし、実際に2人にも対応していただきました。

「確実な知識を得ることができたため、今後活かしていきたいです。体験することで学べたこの実習は有意義でした。」とスレイさん。見るだけでなく、実際自分がやってみる、という体験型の救急対応訓練は、単に知識を得るだけでなく、できた時の自信にもつながっているように感じました。

「言葉は通じなくても皆さんが歓迎してくださっていることが伝わってき、とても雰囲気のいい中で研修ができたこと、またこのような機会を与えてくださった支援者の皆様に、本当に感謝しています。」とマニーさん。

「救急隊の機敏な動きや医療従事者の患者への心配り・姿勢など、日本に来てみて知ることができたことは、たくさんあります。技術はもちろん、今回学んだことを新しく入ったスタッフたちに是非伝えていきたいです。」と2人からの感想を受け、研修は修了しました。

本招へい事業に続き、次はカンボジアで医療研修が実施されます。詳しくは次号で！

ザンビア／チペンビ小規模農村開発ローン

最後のグループが完済！

昨年6月に100万クワチャ（約1万5千円）のローンを締結し、地鶏の飼育・販売事業を始めたミルルグループが4月24日にローンを無事完済したことをご報告します。

ンジョブさん（右）とミルルのグループメンバーたち

以前より天然塩やひまわり油を採取して販売したり、あるいは自分たちの家庭菜園で栽培した野菜を村で販売したりして、小規模ビジネスの経験があった彼女たち。チームワークが良く、なによりもまじめな彼女たちは一度も返済を滞らせることなく完済までこぎつけました。

12月には鶏舎を完成させ、2月にはニワトリの数を20羽から35羽に増やし、4月には5羽の地鶏（1羽あたり35,000クワチャ（約530円））を販売することが出来ました。残りの地鶏も健康状態は良好で、すでに売約済みです。地鶏の数が増えたため、現在の鶏舎はやや手狭な感も。コーディネーターのンジョブさんからは、今後の事業の拡大も見据えて、小屋の周りを一回り大きなフェンスで囲み、その中で日中は地鶏を遊ばせるように指導がありました。

メンバーからは「ローン返済が終わったからといってこの事業が終わるわけじゃないわ！」と頼もしいメッセージをもらいました。確かにTICOとしての支援はこれで終わりですが、その言葉通り、彼女たちにとってはこれからが始まり。飼料となるひまわりや大豆、トウモロコシなどはすでに彼女たちの家庭菜園で栽培されており、鶏舎を清潔に保ちつつ鶏の病気に気をつけていれば、この事業は順調に発展していくことでしょう。完済おめでとう！！

※チペンビ地区での本ローン事業は今回の返済を以て一つの区切りとなります。
いままで本事業を支えて下さったサポーターのみなさま、温かいご支援をありがとうございました。

離任のご挨拶

酒井浩子（保健医療専門家）

ご挨拶が遅くなってしまいましたが、3月に離任し１年8ヶ月間のザンビア駐在を終え帰国しました。

ザンビアでは、モンボシの妊産婦ケアプロジェクト開始前から3年間のプロジェクト期間の半分まで保健医療専門家として関わらせて頂きました。計画通りにいかないことや、想像をこえる出来事の数々に初めは戸惑いながらも、関係者とのコミュニケーションを通して問題が解決し物事が進んでいく楽しさ、フィールドに行く度に新しい発見があったザンビアでの日々を懐かしく思います。村の人から保健省のお役人まで、様々な立場の多くの方々に出会い、一緒に仕事をする中で本当にたくさんのことを学びました。ザンビアそして日本のたくさんの人に支えられ、充実した日々を送ることができたことを有難く思っています。これまで暖かく見守って下さった皆様、本当にありがとうございました。

プロジェクト期間はあと半分、引き続き応援のほどよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

田村幸根（保健医療専門家）

みなさま、はじめまして。このたび保健医療専門家として７月下旬からザンビアへ赴任することとなりました、田村幸根と申します。

日本での看護師としての病院勤務、その後小さな村の行政保健師としての経験を経て、今回TICOが行う「地域住民が支える安全な妊娠・出産のための支援事業」に従事します。

TICOは、日本の徳島とアフリカのザンビアという二つの土地で、双方の経験や課題を共有し還元しあいながら、地域に根ざした活動を実践しています。私自身も、日本、ザンビアといったくくりの中でなく、人と人とが支えあう地域、社会づくりを目指した道筋を、住民の方々に教えていただきながら一緒に作っていくことが今から非常に楽しみです。

初めてのザンビア。困難なことも多くあると思いますが、「心はいつも熱く」前向きに取り組んでいきたいです。多くの支えがあってこそ活動させていただけることに感謝し、現地のリアルな声をみなさまにお伝えしていけたらと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局長 福士庸二のつぶやき　畑(はた)ボラしませんか

最近昼休みの合間をぬって、畑に出ることが多くなった。土いじりとは、実に楽しいものだ。

TICOでは今春より、ザンビア支援のためにさくら農園と協力し、ミシマサイコ（三島柴胡）というせり科の薬草の栽培に取り組んでいる。聞きなれない、しかも人名のようにも聞こえるこの植物、実はサイコサポニン、フィトステロールなどといった成分が含まれ、解熱・鎮痛・解毒として抗炎症や肝臓などの漢方治療に用いられる優れモノ。大柴胡湯（だいさいことう）や抑肝散（よくかんさん）などの漢方薬の原料となるそうなのだ。そしてこのサイコ、収穫できればなんと製薬会社が買い取ってくれる。もし買い取ってもらうことが出来れば、収益の一部をザンビア支援に当てることができる・・・こんなうまい話はない！！そう、話はうまくいかないのだ。

栽培にあたっても地球環境に配慮し、農薬や科学肥料を使わず、雑草避けのビニールも被せない。ということは、この暑い時期、すくすくとサイコが育つどころか、畑は雑草まみれになってしまう。

サイコの収穫は12月。それまで地道な努力が実るか否か？乞うご期待！ではなく、みなさんも是非畑に足を運んで手伝っていただきたい。貴方の有志、草取りボランティアをお待ちしております。

ボランティア希望者は下記事務局までご連絡ください。

草取りのようす

ミシマサイコの花

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方(書き損じはがき等含む)

今心株式会社、河合純子、佐藤文子、高木クニ子、石橋万理、唐住洲子、田崎小百合、野々木、清久、田淵幸一郎、合同会社PlanB、矢田安枝、浮森和美、田淵規子、TICOサポートクラブ、石岡ミサオ、原田栄枝、吉田修、株式会社デンソー、匿名3

会員を更新された方

真子多恵、垣原宏治、須藤榮子、畑和子、井内一志、大瀧知津枝、町田美佳、田所幸枝、尾崎富美子、石橋万理、大脇甲哉、ダスキン川島、唐住洲子、萩森健治、長野修身、池北國子、田淵元樹、八木正江、原田恵子、大島、古川彩香、特定非営利活動法人ＡＭＤＡ、石村明子、松田俊太郎、長野茂夫、佐藤寧子、山本秀樹、原田栄枝、長野晶子、入交秋子、新野和枝、竹下みどり、瀬戸口千佳、庄田多江、匿名1

新たに入会された方

山田こどもクリニック

●2012年3月24日～2012年6月30日分
●順不同、敬称略

書き損じはがきを集めています。

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行　山川支店（店番号344）
普通 0199692
特定非営利活動法人TICO
代表理事 吉田修
カナ入力の場合は、トクヒ）テイコ

募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからお買い物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧下さい。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター “Face to Face” を毎号お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000
正会員		¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649
加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。
なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧になるか、下記までお問い合わせ下さい。

TICOニュースレター Face to Face 第30号
2012年7月発行　発行人：吉田　修
編　集：庄田　多江

特定非営利活動法人 TICO 事務局
〒779-3403　徳島県吉野川市山川町前川120-4
電話／ファクス：0883-42-2271（平日 9:30～18:30）
メール：info@tico.or.jp　/　ウェブサイト：www.tico.or.jp